

生哲原杉 大連 自留 局 殿 高 四
▽号外とはいえ自連に書くところ
シヤチヨバツテしまいそうだ
ったし、全くとまってるいな
いせいもあつて、わけばく
いで書くことにした。そのせ
いか、珍しくえろうマジメで
あまり杉原らしくないかも知
れない。▽近況。27日の夜中
また倒れてしまった。梅雨が
あければ少しはマシになるだ
ろう。2日、生誕27周年。

なんで自連をつぶすのか

「さわめて個人的に」

「70年代に突入したのだ」という宮園さんの原稿(自連38号)のガリを切りながら、Kさん(元パンドラ)も同じようなことを言っていたな、と思い出していた。宮園さんの言うように「時間的」だけだったかどうかは別にしても、確かに「60年代の潮流の中にいた」。それらの殆んどが「落ちるとこまで落ちて」の、自連だけが中途反端に続いている。いや、なにも、同じサイクルを揃かにやらんとか、60年代とか70年代とかに格別な思い入れを込めようとかいうわけでは決してない。だが、ともかく「世の中かわった」のだ。赤瀬川源平の言った「カブの72年」、沖繩は「返還」され、佐藤栄作は「退陣」、藤純子は「引退」、杉原哲生は「二一歳」になった。

なんでやめるんや? 作り手が、もうイヤになったんか? しんどいんか? それとも、方針の誤りが明らかになったのか? エトセトラとせとら。何人もの人から訊かれた。ちよつと気取って答えれば「持ったものを」を「あつた」にしろくつかめないうのである。やめてみるとわからんこともある、というわけだ。自分にとって自連は必要か、というのも、自連がなくなればわかるだろう。必要だとすれば、自連の何が必要なのか、も。

言い換えれば、つぶすことで総括を出す、ということだ。総括して、展望を出してやる(「つぶす」ののではない)。それは大抵、何もせぬことを合理化するだけだ。へ「する理由がないとき、それを、しないことの理由にしない」。勿論、ただつぶせばいいというものではないだろう。だから、つぶし方が問題なのだ。それを、たとえば、40号製作で、残務整理で、これが自連の意味か、これが自連の総括か、と一つ一つ確認していきな。

持続っていうのは日々新なりってことだ。同じ形態をとりつづける、くり返す、それだけでは決してない。自連も創刊以来、ほぼ三年半、よく自身開って約そ一年半。良くも悪くも慣れがある。早い話が、固定化、慣性、マンネリズム。収めておけば、財産を喰いつぶしながら60号でも70号でも続くだろう。しかも続くことを幻想を「つぶす」でいるらしい。……そして最後は、ノタし死二。持続「」やりつづける。今の場合、やるとは続刊を断ちきることが「行動」。勿論、繰り返しになるが、どうつぶすのか、つぶして而なにを「めたらしくつかむ」のか、は大きな問題だ。

続刊はちよつとしんどいが易しく、つぶすのはしんどく難しい。北さんも、また昨秋の福岡や平連の経験から

巨さんも、そう言う。福岡や平連ではリブせる自信のある人がいなかったそう。早々と「リブ」することは案外難しい。と言ったばくは、だが、その言葉の陰で、リブす言うたんやからリブれるやろとタカをくくっていたのかも知れない。その「イイカゲン」さが、ここへきて響いてきて、どないしよ、と頭をかかえている。

ばくは、よく自身は、なぜ自連に関ったのか、聞いているのか。★他にすることがない(当座、特にこれ)。というものがなかった、ない。★向井論文「統一をなく」連合を「」を讀んで「共闘、連合、の考え方にひかれた」。★新しい運動、組織づくりの試行モデルとして(「共闘」と思われていない「共闘」)「模えなない共闘、その時共闘体」。★事務その他が自分に合っている。★関る中で自連のタテマエに共感した。など。

試行として、というのにばくはかなりウエイトをおいている。もはや慣性で動いているモデルは試行に値しない。やり方を変えてつづけてみるとか、このモデルに固執することはない。さうさつと次の試行をやるべきだ。また、自連がばくにとって「安住の地」となつてしまっているのなら、なおさら他のことをすべきだ。(「運動」とは「移動」と転換である)。

自連のタテマエとは……である、という形を言うことはばくにはできない。それは、ばくが自連の事務や発行を通じて知ったものだからだ。へとすれば、タテマエと言うよりホンネなのかも知れない。

だがともかく、そのタテマエと実態とが随分かけ離れてしまっている。しかも目指しているものへ向っていない。たとえば創刊号号外には次のようにある「いまわれわれの考えを表明するもつとも直截なものとして「自由連合」以外のゴトバが見当らない以上、些少の「ガイ」へ「アナ連」機関紙「自連」を継承するもの、など」をおされることこそおかしい。ならば、さうでない「タテマエ」とか「離れた」自連は自連でない。ミニコミへと「自連」を、ばくは、ばくは、出しているのだ。自連でない自連を出すことはない。いや、自連でないものを自連と偽って出すことは許されない。へ「自連でなくたっていい人は、それを自分で出すなり、他のものに聞けばいい」。たとえば、編集社員間の関係にしても、随分無残なものだ。それなのに、関係を、連合を、という空々しさ。詐欺みないなものだ。……。

「つまりは失敗やったということやなしとあなたは言うかも知れない。いや、うまくいかんからやめるといふのではないんです」と応えたと怪訝がるだろう。だが、ばくは、むしろ「やることはやった」と言うべきだと思ふのだ。

たとえば「既成」に對置し、新しいタイプの「政治新聞」と「その概念」を創ろうという「いや、それほど大したことではけんのはわかってる。爪のアカほどでも、いままでないものをつけ加えたる、という……。へその爪のアカほどがばくの「問題や」と「茲賀周吉」(「と向井孝」)は言う。確かに、やるべきことは余りに大きく、実現されることはちよつとばくなことなのだ。やりとげるとは、大きなことをやったことではなく(それは大抵ウソだ)、その「チップ」なことをやることではないが、目指したもの、これとこれとこれ。うち、できたもの、これとこれ。だから成功。といった論理での総括(ウラ)

は、カッコーいいが無意味だ。何か一つでもできたのならそれは大成功だ。ぼくらは勝つまで負けつづける。いつだって負けだ。それが、明日の明後日の、勝ちへとつながるかどうか、だ。

自連は、何かをやりとげた。本当にできたのかどうか、何をや、何をやらなかったのか、それは自連をつぶすことで明らかになるだろう。具体的には、たとえば杉原哲生が何をするか、に現れる。

★「きわめて個人的に」と言いながら、余りそうではなくてしま、号外に書かずやけぼくくいにした意味はなくなった。ともあれ、自連の号では、もう少し明確にしますデス。

？ 南無自連遍照金剛

六月二五日の大阪読者会で「自連紙は……其編する諸組織個人の真なる自由連合を具体化する契機をつくり出すために、まず紙面においてそれをつくり出そうとする」という創刊号号外の一文が、ちょっと問題にされた。それは契機になつてゐるんやろか、というわけだ。

ぼくの考えは、一つにはこうだ。たとえばぼくらが知り合うきっかけになつてゐるやないですか。自由連合は、創着といかに関係するか、なのだから、ここにこうして集つたというのは、その端緒の端緒だ。そう言う、それじゃ自連の内容は全然関係ないのじゃないか、との声あり。だが、のたとえは「聖教新聞」で呼びかけられても集らないだろうからそうとは言ひきれない。因「情報内容よりも……追求してゐる交通に興味がある」。

もう一つはこうだ。「南無自連遍照金剛」と何度唱へたって何もなし、ということ。その人が動いて初めて契機となる。それなしに、なんの契機にもなつてないとかいうのはおかしいのではないか。そのとき社員だということも、共通する。自連はオファダの代りにはならない。読めば連合できるというふうなものでは決してない。読めば連合できるはずなのだろう。だが実際はできない。自連のタテマエが間違つてゐるか失敗したかだ。

……のはナンセンス。

あの……とりやとりを通じでしか新しい交通はない。受けとる側の働きかけがポイントなのだ。

……何か大へんなことが出来るような幻想をもつてながら、自分で自身に引き戻して見つめるべし。めるのではなく、舌足らずながら終作的にメモリました。

自連と連合・J・I・Iの

……五五号の鶴見俊輔「リンチの思想」は、ちよ……国……より長さ、それ自体がリンチを超える思想を含んでゐる、というのには思ひ当ることも多かった。だが、次の箇所ではひっかからざるをえない。

……極端な場合には、日本のアナキストの持つてゐる革命のイメージだけども、とにかくぶつこわしてしまえばいい、あるときに政府がつぶればいい、革命の瞬間としてとらえられてしまふ。

勿論、鶴見氏は「日本のアナキスト」を引き合いに出しただけだろう。この前後の論旨は、中国と日本の比較という以外にはあまり異議はない。ただ、ひとさまからアナキストと呼ばれることがあるせいか、少し気になる。

……の個人的なことを言えば、「革命の瞬間」なんて

いう捉え方は全くしてない。今までもないし、これからはもないだろう。むしろできないのかも知れない。一方そういう捉え方をする人はいただろうし、いる。「日本のアナキスト」はそんな考え方はしない、アナキズムはそんなものではない——とは言えないし、言いたいわけでもない。へ敗ていうなら、ぼくのアナキズムは、アナキズムはこういう思想であるからアナキストはかく考へるなどという規定の仕方と、丁度逆な原理だ。そのことは、鶴見氏が原理だけじゃだめだと言つてゐることと近いことだと思ふ。

「リンチの思想」は講演と質疑応答に分れてゐる。その講演の部分の最後に、次のようにある。

……デモに老人が参加するといふふうなことは、デモの効率は低めるかも知れない。つまり速く歩けないから。速く歩かせるというのには警察の戦術でもあるわけなんで、パッパパッ早くやていくといふのはあまりいいことじゃない。老人がデモに入つてゐるといふふうなことは、結局厚みをつくつていくことであり、同時に何かデモの強さといふふうなものを増していく源泉であるような気がするんです。これは、ぼくの組織論に近い。それだけに、先の「日本のアナキスト」にひっかかったのだ。両者を比較するまでもなく、先の発言にキメリクがあるのは明らかだ。キメリク——峻別、排他、十把ひとからげ——。先の発言は「リンチの思想」からきてゐるのではないが、その「リンチの思想」とは、実は、国家から連合赤軍までを貫く組織原理ではないか。へこの場合の原理とは、鶴見氏と意味がちがう。それはまた、ぼくの言う「ファシズム」へ集団の構造としての「ファシズム」でもある。「リンチの思想」の頁版を説く鶴見氏が、同じ発想をしてしまふ、そういうことは珍しいことではない。

……組織の構造——抄——虫の好かん奴といふのが誰しもある。好き嫌いは、イデオロギーの如何とは無関係だ。共通の課題に取組み、一つのグループを成してゐる人間の間にそれはある。明確な志向性・目的をもつてゐる集団が自壊するのは、大抵、人間関係の些細なもつれからだ。つまり、一つの運動を進めるとか共同で生活するとかいふとき、しかもとりかかつてからは、目的やイデオロギーよりも一層些細な生活技術・事務・体質・発想や思考のコンスなどが大きなウェイトを占める。好き嫌いのものは克服すべきだろうが、相手も自分も生身の人間だ。さて、ファシズムはこうした体質の問題だ。といつても個人の独裁的専横的性格のことではなく、集団の体質・構造のことだ。ファシズムをイデオロギーや階級の問題として捉えると、たとえば経営合理化へ邁進だけではない、をその一部である反戦パージなどだけに見てしまひやすい。最新マネジメントは既に管理社会、逆ユートピアを明確に描いてゐる。人間を抱え体制は企業レベルでも国家レベルでも実現されつつある。これはブルジョアジー打倒へだけでは解決しない。利潤と支配から配分と自治への構造のくみかえが不可欠だ。さて、も一つは、無根と寛容こそがファシズムだといふこと。単に横暴の黙認となることだけでなく民主主義国家・柔構造社会に於ける支配原理だ。ファシズムは野犬狩のトラックに乗ってきたりしない。むしろ冷静で合理的なものとしてみる。しかも、どんな革命的な人でもそれから自由ではない。……（つづく）